

# 拡大中東地での挑戦

## —花につつまれた暮らしを求めて—

佐々木 晃 彦

### 1 花に人生を重ねる

私たちは花に、自分の心を託すように意味を与えています。アサガオ＝愛情、儂い恋、菊＝高潔、山桜＝純白、パンジー＝思い、ハス＝遠くに去った愛、桃＝恋の奴隷、鬼百合＝富と誇り、という具合に。加えて、花の咲くのを待ち、花が散るのを惜しむ心情は、花に人生を重ねている証と思います。

花と人間の関りが生まれたのは花粉の分析から、260 万年前に始まる旧石器時代と分かっています。イラク北部のシャニダール洞窟で埋葬されたネアンデルタール人に、ヤグルマギク、ノコギリソウ、キンポウゲが手向けられていたからです。「ネアンデルタール人は長身で、脳の容積は現代人より大きかった」と聞いたことがあります。紀元前 10 万年前から 4 万年前に存在していたネアンデルタール人は、花を愛し、美を愛する心を持った人だったのですね。

ガーデナーが初めて登場するのは今から 4000 年前です。エジプトとメソポタミアで食用として、イチジク、ブドウ、肉料理の香料に使うものを育成していました。紀元前 3000 年～同 30 年の古代エジプト時代には、神に睡蓮が献花されていました。新王国時代のテーベの壁画(大英博物館所蔵)には、中庭の池に栽培される睡蓮と、水際に植えられたパピルスが画いてあります。ツタンカーメン(紀元前 1335 年～1327 年※諸説あり)の墓からは、ヤグルマギクの花輪が発見されております。何かしら清爽で、気品のある世界ですね。

こういうことを知ると、アメリカの関税障壁設定、交渉に日本は防衛費の GDP 比 3%を貢物にする云々の世界を離れ、その時代に潜り込んで一緒に肉料理を食べたくなります。サハラ砂漠で遊牧民に招待された時は、テントを張った家でラクダ肉を手掴みで御馳走になりましたし・・・胃は大丈夫と思います。

## 2 エジプトを彩る火炎樹

現在のエジプトに目を向けると、人口はナイジェリア(2億2,771万人)、エチオピア(1億841万人)に次いで1億730万人、アフリカで3番目の大国です。そのうち労働人口は2,600万人で、農業従事者は651万人です。かつてはイギリス領エジプト(1882～1922)で、イギリスの支配下に組み込まれ、経済発展をしてきた歴史を持ちます。

国土全域が砂漠気候で、その大半がサハラ砂漠。国土面積は10,015万haで、農用地は406万ha(4.1%)。農業は基幹産業の一つで、大半の農地はナイル川流域にあり、その一部で花卉栽培が行われています。ちなみに日本の国土面積は3,780万ha、農用地は437万ha(11.6%)です。(資料：FAO統計、井澤壤土・ジェトロ・カイロ事務所)。

エジプトの観光用ポスターには、必ずラクダがいます。従って、エジプト＝砂漠のイメージが強くなるのは致し方のないことです。しかし季節によっては、西アフリカ原産の常緑高木である火炎樹が、街路樹、または住宅街の庭園木、公園では鑑賞目的の花木として見ることができます。

ところで総じてエジプト人は、「花は花。それで結構ではないの？」と考える方が多いと聞きます。大様で磊落というか・・・バラだろうが、桜だろうが、一括りに全て「花」。宜しいではございませんか？ここに間違いはありません。魚は魚・・・鯛だろうが、鰯だろうが、全て「魚」でまとめてしまう。「細かなことは止めてくれ」という訳です。米食が主流の私たちも、例えば「つや姫」「ひとめぼれ」「ささにしき」を米として買い、ご飯として食べています。味は確かに違います。しかし、米は米、ご飯はご飯と一括りにしております。

それにしても、木の名前、植物の名前・・・驚く程よく知っている方がいます。多少の知識があれば頭に引っ掛かり、転がる雪だるまのように少しずつ大きくなります。そして理解力が一層増して知見が身に付きます。しかし頭にフックがないと、何を聴いてもスルスルと滑り落ちるんですね。世の中には頑丈な木玉フック、ステンレスフック、合金鋼フックなど色々とあるのに。結局、頭には何も残らない。こういうこと、実は私には日常的です。

花バイヤーの小林邦宏が「地元エジプト産のユリ、菊を花屋さんで見たのですが、流通のインフラが整っていませんね。小さな花屋さんが沢山あって、観葉植物も含め、プレゼント用、自宅用と、花のある暮らし、緑のある暮らしを好むエジプト人の気質は見られますけど」(『歴史ある花文化』～エジプト・カイロ、2019)。そして「バラはケニアから輸入するなど、この国の花需要は広がるのではないのでしょうか」(同レポート)と明るい未来にも触れています。最後に、花の名称にはこだわらないエジプト人も「エジプトと言えばピラミッドとスフィンクス」と一括り、一つ覚えの人には拘りがあってガッカリするようです。これも付け加えさせて戴きます。

### 3 園芸・造園職種—世界から高評価—

世界に占める日本の面積は0.3%でしかない。しかし、その位置が最北端の北緯45度33分から最南端の20度25分と、亜寒帯から亜熱帯にわたるため、自生植物の種類はヨーロッパにも匹敵すると言われてきました。ここで私たちの生活をデザインしてきた、日本に於ける花の歴史に、少し触れたいと思います。

花は手で折っても、その昔は単に眺める対象に過ぎませんでした。それが、仏前に供える花が独立し、桃山時代末期から「立花」となり、生け花に発展しました。仏前に供える華瓶(けびょう)、燭台、香炉の「3具足」の一つ、華瓶に花を飾ること、それが生花の由来です。我が国の花卉栽培は、そのルーツを立花にたどることができるのです(注1)。

江戸時代に入り、特に、元禄時代(1688～1704)、文化・文政時代(1804～1830)の平和な時代に園芸は発達しました。江戸の園芸文化が発達した理由に、歴代の将軍が花好きであった、大名屋敷に珍しい植物を植えることが流行った、長い鎖国で国情が安定していた、椿やツツジなどに多くの品種が生まれた、菊やアサガオなどに花の美しさや変化を競う楽しみ方が生まれた、などを挙げることができます。こうして世界最大の園芸都市、江戸の緑環境が整い、世界トップクラスの現在に繋がる園芸産業が誕生するのです。

江戸の6割を焼き、10万人が亡くなった明暦の大火(1657)後、大名屋敷を上屋敷、中屋敷、下屋敷に分けました。そして広大な敷地に大規模庭園を造成しました。六義園はその一例です。8代将軍の吉宗が向島・隅田川堤、王子・飛鳥山、品川・御殿山に桜を植樹、江戸近郊にも桜の名所をつくり、町人や下級武士の間には盆栽、草花、観葉植物などの鉢植えが流行しました。その結果、各分野に園芸・造園関係の職種が誕生しました(注2)。以下の図では店先の花屋が、頭巾を被った老人客の問いかけに反応し、手前には花束を買って帰る母子連れが見えます。花屋の前に車を引いて人形芝居を演じているのは「小人形座」です。(出典：槌田満文編『江戸東京職業図典』p.147、東京堂出版)



幕末から明治初期に来日した外国人は「匠の技」として、その高い職人技を絶賛しております。その幾つかを紹介致します。イギリス人紀行作家・写真家のイザベラ・バード(1833～1904)は「製品の仕上げの良さに注目すべし」、アメリカ人地理学者・紀行作家のエリザ・シドモア(1856～1928)は「日本人の暮らしは芸術性と装飾的工夫に満ちている」、スイス人外交官でスイス大統領を務め、幕末の1863年には全権公使として来日したエメ・アンベール＝ドロー(1819～1900)は「その美しさは、ヨーロッパ人が大理石や貴金属を使って作成した家具と競う」、ドイツ人実業家で考古学者のハインリヒ・シュリーマン(1822～1890)は「模様の美しさ、精緻な作風は、セーブル焼きに勝るとも劣らない」と、当時の世界には類を見ない花文化を形成した日本を絶賛しました。イタリアのヴィットリオ・アルミニョン(1830～1897)は1866年7月に来日、日伊修好通商条約に調印した海軍中佐ですが、「日本人は花が大好きで、江戸近辺の植木屋たちは冬でも花を栽培し、大量に供給している。花屋は街中を売り歩き、貧しい人々の住む地域でも確実に買い手を見つけることが出来る」(大久保昭男訳『イタリア使節の幕末見聞録』(新人物往来社)と書きました。

街は清潔感に溢れ、現在の日本のガーデニングブームを上回る園芸ブームだったんですね。確かに、多くの来日者が「日本で驚くのは道路が綺麗で清潔なこと」と語っております。現在の車に代わる当時の馬は、重要な移動手段でした。イザベラ・バードも旅の途中で馬を調達し、東北地方を北へと向かいしました。でも、「道路で馬糞を見たことがない」と称賛しました。

話は大いに逸れますが、ペット大国のフランスですが、道路の至る所に多彩な色、形、それに新鮮な香りが漂う犬の糞が咲いています。歩くのに通り道から目を離せません。見上げれば紺碧の空にエッフェル塔、少し目線を落とせば19世紀のパリ大改造計画に伴うシンメトリーな建物群、その全体が統一的な都市景観です。シッカリと目を落とせば、地べたで待ち受けているのは数メートルおきに咲き誇る犬の糞、糞・・・。芝桜ではありません。大盛をヌル～と踏み込んでしまったか、慌てて地面の角に擦り付けた形跡もあちらこちらに。この10年で殆どの飼い主は犬の糞を片付けるようになったと耳にしますが・・・あれはどうにかなりませんかねえ。

## 4 花とともに生きる

私は持ったことがなく「ええっ」と驚かれますが、今や殆どの方が高性能なカメラ機能付きの携帯電話を持っております。(そんな「呆れた」というような顔をなさらないで下さい。極めて質素な生活ではありますが、ゴメンナサイ！携帯なしで、ノンビリと生きております。連絡ですか？手紙と葉書で間に合っています・・・間に合わせております。そういえば私、腕時計を持っていません。時間を知りたい時ですか？傍で腕時計をしておられる方に恐る恐る尋ねます。大学の授業？教室の後方に、大時計が掛けてありました)。

横道に入ってすみません。今は携帯で、簡単に写真を撮ることができます。

なかでも花は被写体として人気があります。咲いている花と、その周辺を見ながら被写界深度を考え、画面構成、ボケ味の美しさ、そして質感を楽しむ。カメラ性能が向上しているので、カメラ自身が勝手に上手な写真を撮り、私たちに感動を与えてくれるのです。

20年前に6000円で買ったカメラを今も使っています。道すがら、綺麗な花に出逢います。未熟な撮影技術も、美しい花が補って余りあります。美しく上手に撮ったのではありません、あなた自身が美しいのです。



暮らしの中に花を取り込む方法・技法が、日本では生け花となり、欧米ではフラワーデザインとなって発展し、確立されてきました。花を単に、器に入れて飾る対象に留めることなく、人工的な手を加え、花冠や花の首飾りなどとしての宗教的要素を持つ利用法が同時に発生したのです。明治初期に日本に紹介されて以来、現在までに発展・継承されてきた花は、服装との関係性で特質分野を形成してきました。宗教的な要素に加え、時代や環境に合った装飾性と機能美を併せ持たせることが可能となったのです(注3)。

中東諸国で花は、どのような時に使われているのでしょうか。日本と良く似通っています。紙面の都合でサウジアラビアとアラブ首長国連邦(UAE)に限りませんが、両国とも見舞い、結婚祝い、出産祝いなどが上位にきています(注4)。ただ、日本は広範囲にわたって花(の名前)を活用してきました。

先ず**季節の訪れ**を告げます。例えば、1年を振り返ると、1月の成人式、2月のバレンタインデー、3月のホワイトデーと卒業式、4月の入学式、入社式、5月の母の日、6月の父の日など、行事・習慣が定着しており、12月まで花に囲まれています。

色々な植物を花期の順に書き並べれば、花に拠る暦、**花暦**(注5)が出来ます。五節句のなかでも3月3日(桃の節句)、5月5日(菖蒲の節句)、7月7日(菊の節句)は、花が中心の行事になります。

ところで人生に於ける華々しい状況を「**3つの花道**」などと言います。少し時代錯誤を感じますがお許し下さい。人生の花道、引退の花道、そして男の花道です。歌舞伎劇場で観客が役者に花(祝儀)を贈るのも花道です。奈良・平安時代に相撲の出場力士が支度部屋から土俵まで造花を付けて入場したことから、この往復する通路を今も、花道と呼んでいます。

冠婚葬祭が加わります。出産祝いにはパステルカラーの優しいイメージの花を選びます。散りやすく、香りの強い花は避けます。お見舞いには、心が休まり、明るい気分になれる、例えば、バラ、チューリップ、ひまわりが使われます。法事には、ユリ、菊、蘭、キキョウなど、白、黄色、紫系を選びます。

花は**国や地域**を表します。民族を象徴する花として、風土、伝統、伝説と結びつき、広く人々から愛される存在です。それは、国単位、国花のないアメリカでは州単位、わが国では都道府県単位(注 6)です。都道府県のシンボルとして、「都道府県の花」(1954)、「同鳥」(1963)に加え、「同木」(1966)が条例で制定されています。

日本には「これが国花だ」と定められた法律的なものはありません。あくまで歴史や国民感情によって慣習的に伝えられ、コミットメントされたものに過ぎません。まず「さくら」が国のシンボルとして定着しております。集団美が美しく、庶民的、大衆的であるとの理由で、古くから読み物や画題として親しまれてきました。桜はパッと咲いて、パッと散るので、武士道の“いさぎよさ”にも結び付けられます。もう一つ、歴史的に「菊」が皇室のシンボルとして定着し、パスポートの紋章や硬貨の図柄として使われております。

代表的な日本**女性の名前**に花子が使われます。桃子、さくら、小百合、菊代などの命名には、「美しく育って欲しい」「健やかに育って欲しい」との願いが込められております。(「名前ランキング」(明治安田生命保険)2024 を参照)

花は家々の紋所である**家紋**として、家の権威を誇示する目的でも使われます。平安時代の末期に公家貴族が宮中に入出入りする際、当時の自家用車である牛車が他人のものと間違われないように目印を付けたのが始まりです。現在は紋付き羽織に見られます。

天気は気象衛星「ひまわり」が撮った映像を解析し、予報を出しています。ヒマワリは天気の良い日に咲き、朝方は東を向いて日の出を待ち、夕方は太陽を追って西向きに咲く性質があります。いつも地球を同じ方向から見ていて、1日に一回地球を回る、この二つの習性が気象衛星の動きと一致していることから、一般公募で採用された**機械の名称**です。

花は、俳句、短歌、詩、**故事・諺**(注 7)、画題、映画、演劇、音楽のテーマ、「生」の**代名詞**としても使われています。

童謡詩人の金子みすゞが生まれ育ったのは長門市の仙崎。深閑とした落ち着いた赴きの港町です。書店を営んでいた実家「金子文英堂」の跡地は記念館となり、当時の雑誌を展示しています。北九州市折尾に20年ほど住んでいたの、その折りに何度か記念館を訪ねました。みすゞの童謡集を捲ると沢山の花に出逢うことができます。みすゞには自然を優しく見つめた作品が多く、次の作品では花も鉢も生きるのに必死でありながら、花を思いやる蜂の優しさが表現されています。そこには「花笑み」とともに「哀しさ」が透けて見えます。

露

誰にもいわずにおきましょう。

朝のお庭のすみっこで、  
花がほろりと泣いたこと。

もしも噂がひろがって  
蜂のお耳へ入ったら、

わるいことでもしたように、  
蜜をかえしに行くでしょう。  
金子みすゞ

名もない草も  
実をつける  
いのちいっぱい  
花を咲かせて

花を支える枝  
枝を支える幹  
幹を支える根  
根は見えねんだなあ  
相田みつを

花がもたらすイメージは、際限のない広がりを見せます。花や枝、幹を支えているのは見えない根。人間社会も同じです。花や緑が在ることによる効果、花卉の効用(注8)は、私たちの精神を支える拠り所となっています。

## 5 ガーデニングブーム

ランドスケープ(景観)をつくるランドスケーピングには、公的空間も含めて総合的にデザインする意味を持たせる傾向にあるようです。環境デザインを施す新しい領域です。例えば、ハンキング園芸、コンテナガーデン、トラフガーデン、トピアリー、アクア・プランツ(注9)などがあります。

美しい景観と実用的効果を求めるエコロジー緑化も盛んです。園芸の参加人口も少しずつですが確実に伸びていることから、都道府県や市町村などの地方自治体が、花、植木、果樹といった園芸全般に関わる相談に応える「緑の相談室」を設けております。

樹木医資格制度が発足(1991)して 35 年になります。樹木の診断、治療、後継樹の保護・育成を行う専門家です。受験資格は樹木の診断、治療の業務経験が 7 年以上あること、そして 2 週間の講義と実習を経てからテストを受け、適性判断を行った上で資格審査が行われ、可否の判断が下されます。ブームの進展に伴い、各種認定制度が生まれております。例えば、(社)日本家庭園芸普及協会が開設(1992)した講義を受講し、合格するとグリーン・アドバイザーの資格を得ることが出来ます。日本ハンキングバスケット協会が開講(1996)した技術講習会を受けて認定試験に合格すれば、ハンキングバスケット・マスターとして愛好者の育成に携わることが可能になります。

資格を取るって、私にはチョッピリ辛そうな世界です。ある程度の犠牲を払って学習しなければ、資格は取得できないでしょう。居酒屋で過ごす時間を減らし、自分に投資して現状維持を払拭する・・・これは Comfort zone(コンフォート・ゾーン=ぬるま湯、安全地帯)を抜け出すことでもありますよね。No date on the calendar is as important as tomorrow(=カレンダーのどの日も、明日ほど重要ではない)は、アメリカ人ジャーナリスト、ロイ・ハワードの言葉。過去はどうしようもないが、明日からは違うやり方で生きよう、実行しようとする強い意志、これなしでは資格の取得は出来ません。

心身に障害を持つ人や高齢者が、花などの植物に接しながら治療やリハビリを施すことを、ホルトセラピー、またはセラピー(園芸療法)と言います。病気の回復だけではなく、心の健康維持、ストレス解消にも役立ちます。

欧米では 19 世紀から、高齢者が植物を育てる喜びで満足感を味わい、作業に伴う運動効果で身体的・精神的向上に結び付ける、この両取りが実施されてきました。大学には園芸療法に関連する講座が開講されており、園芸療法士の資格認定制度も設けられております。

## 6 一輪の花を求めて一中東での奮闘

さて、ここから私の小さな体験に触れますこと、どうかお許し下さい。拡大中東地域の最西端に住む(1972~1975)私の願いは、花を咲かせることでした。G ランクの砂漠に覆われた地です。無謀なことと思われました。周辺には、とても無理と諦め、亀を育てたり、鳥や猿を飼ってる人もおりました。しかし、一木一草もないサハラ砂漠で住んでいるからこそ、何としても一輪の花を咲かせたかったのです。

福島県と県境を成す飯豊山麓に在った我が家には、少しばかりの畑がありました。小さい頃から花を咲かせている母の作業は見慣れており、簡単な畑仕事も手伝っておりました。しかし、砂漠では難しいことが多過ぎました。まず、海底が隆起してできた砂には多量の塩分が含まれていました。それに雨が全く降らず、空気は常に乾燥しきっておりました。

ところが隣家のマダムは普段から、木や花の手入れに余念がありません。杉、月桂樹、椰子が背丈より高い塀を乗り越えて道路に顔を出し、道行く人を楽しませています。まさに「隣の花は赤い」のです。主人は航空会社 UTA の技師で、私はご自宅にお邪魔しておりました。葡萄酒を空けた容器に数本の木の枝が差されています。マダムは「根が出るのを待っているの・・・」と話しかけてきた。「この人なら良い知恵を与えてくれるかも」と思い、相談しました。

マダムは勢いのあるフランス語で―

「私が知っている人を紹介してあげるよ。実は私の所に出入りしている庭師ですけど」。たいていのフランス人は、庭づくりを彼に任せているという。「できるだけ早い方が良いわねえ。だって、土をつくるには結構、日がかかりますから。どのようにして土づくりをするのだって？ほら、牛糞ですよ。砂と混ぜて水を掛けてはまた混ぜる。それを何度も繰り返すのよ。そりゃあ、ひどく臭いし、手は汚れるし・・・、本当に堪らないけど全部、彼がするから心配いりませんよ」。

先ず、庭に花壇の敷居をつくりたいと思い、家主であるムスタファの家に駆け付けました。パン製造とヴィラ(海辺の別荘)の賃貸で生計を立てている彼は、人口が 20,000 人で首都ヌアクショットに告ぐ 2 番目に大きい町、ヌアディブでは有名な吝嗇家でもありました。「エッフエッフエ」と私の足元を見透かすように、焦らし、そして薄ら笑いを浮かべながら、なかなか敷居をつくりそうにはない雰囲気です。「魚心あれば水心」ってもんです。先方の出方次第では、こちらの応じ方も違って参ります。英語でも言いますよね。Roll my log and I' ll roll yours. (あなたが力になってくれれば、こちらも手を貸そう)ハードな交渉？が始まりました。

業を煮やした私は矢も楯も堪らず、「花壇で綺麗な花を咲かせたって、日本に持ち帰ることはできませんよ。私が出て行ったら次の借家人に、今より高く貸せるじゃありませんか」。ちなみに私の家賃は当時、邦貨で約 12 万円でした。現地着任前から会社が準備している家ですが、フランス領事館の真下に在る好立地。塀を廻してあり、安全面では配慮された家でしたが、今思えば、あの時代にあってチョット高いですね。

ムスタファもこの説明で、ようやく納得したようです。ブロックを二枚重ねにした花壇用の敷居が、現地人の石屋によって造られました。ブロックには家と同色の白いペンキを塗ることにした。ムスタファは私に念押しをした。「半年でヌアディブでは最高の花壇をつくってくれよ」。早く日本の花が見たいと、今度はムスタファが私を急かします。さあ、どう返事をしよう・・・「そう急がない方が良いでしょう。こういうのはジックリと楽しみながらするものです」。愉快で心任せなサハラでの会話が続きます。

お隣りの子供、12歳になったばかりのナタリー、通称ナターシャと2歳半のルイックが我が家に飛び込んで来た。



「花壇を造るの？」ナターシャとルイックは仲の良い姉弟で、自分の家の庭だけでは物足りないばかりに、度々我が家に入ってきては騒ぎまわっていた。二人は庭師のお手伝い役を買って、一緒に庭づくりを始めた。今やナターシャは60代後半、ルイックは50代半ばか・・・。「昨日は今日の昔」って言うけど、月日の経つのは早いものです。

ダフォメーから来ている真面目な40がらみの庭師は、「ここで金を貯めて、モロッコで造園技術を学びたいんだ」と自分の夢を語ってくれた。自国に妻子を置いてきて3年になるという。「いつ国に帰れるか分からない」と言う彼に「国で子供が待っていないかい？」と尋ねると、意外にも多くのダフォメー人が、親子離ればなれの生活を送っているという。月2,000円で、土づくりから花を咲かせるまで、花の種や草木の調達も含め、全てを引き受けて貰うことになった。

彼は土づくりに牛糞を使わなかった。現地人街のチャルカにあるラクダ屠殺場から臓腑を運んで来た。ブロック囲いの内側で、砂と混ぜ合わせては水を掛け、また混ぜ返すことを朝夕繰り返した。2か月も続けた頃、庭師は立派な土に仕上げた。日本人(注10)のなかには土を内地から運ばせ、スペインからも機会あるごとに託送している人もいました。2〜3俵の土を入れてもどうにもならないことは分かっているけど、雑草の一本でも良いから生やしたいと皆が真剣でした。

少しずつ庭ができあがるのを横に見ながら、「貝を敷いたらどうだろう」と思い付いた。チャルカで洗濯屋をしている(大きなタライで手洗いをしているのですが・・・)マリからの出稼ぎ人、ママドゥに相談した。ママドゥは私が出勤時間中の干潮時に、貝殻を一か所に集めてくれていた。私は昼休みを利用し、車に大小さまざまなバケツを積み込んで、ママドゥと二人で出掛けては貝殻を庭に運び込んだ。貝を庭に敷き詰めるのに一か月は要しただろう。

## 7 咲いたサンセットコスモス

風が吹けば、道も山も移動するサハラの自然。国土に占める耕作地面積は僅か0.44%で世界196位、電気の利用可能な人口は49.00%で194位の国です。確かに1位になるのは難しいでしょう。でも190位になるのも、それなりに難しい・・・私が暮らす国です。

1974年の4月下旬、一か月の休暇を貰い、日本に一時帰国をしました。1年半振りの日本でした。私は真っ先に故郷・山形の花屋へ行きました。高温の砂地に適した花の種子は何か・・・、探したのはサンセットコスモス、白粉花、三色すみれなど10袋でした。当時、スペイン領ラスパルマスの市場に出回っていた見慣れた野菜も、「1965年頃に日本人駐在員が、日本から持ち帰って蒔いた種が始まり」と聞いておりました。

それなら「私はサハラの地に、日本の花を咲かせ、遊牧民に見て貰おう」と、無謀な夢を見ていました。サハラで大切なこと、それは謙虚であること。それが欠けると相手のプライドに触れます。思いやりも度が過ぎれば疎ましく感じられるもの。何事も程々に・・・と、自分を諫めることも忘れなかった。

一時帰国の日本から“サハラの白い我が家”に戻ると、庭師はガンガン照り付ける太陽の下で杉の木を植えていた。彼は、私が日本から持ち帰った花の種を手の平に乗せ、とても珍しそうに眺めています。種袋に印刷された花の写真が見えるよう表にし、添え木で当てがい、手づくりの土に差し込んで芽の出る日を待ちました。朝夕の水も欠かさず、花の写真を見詰めて祈るように注ぎました。しかし、芽は出ない。降り注ぐ太陽の熱と、朝夕の心が竦った執拗な水で、種袋の写真も早、色褪せ始めていました。



「しばらく様子を見よう」が庭師の口癖でした。彼に勇気づけられ、待ちました。待ちましたが芽は一向に出てきません。花を咲かせたのはサンセットコスモスだけでした。それも銀世界、紅筆など、強いサボテンの隅っこに。

“開けて口惜しき玉手箱”の心境です。浦島太郎が竜宮城のお姫様から貰って来た玉手箱を開けたら、金銀財宝ならぬ白い煙・・・同様、日本で花屋から買い求めた花の種袋。大いなる希望を抱いて開け、蒔いて待ったのですが期待は外れました。思い入れが強かった分、失望感が残りました。サハラ“地に花を”と願ったのですが、“高嶺の花”でした。実は、ヌアディブのカトリック教会での結婚式(1974年11月11日)には、我が家の花壇で咲かせた花を飾ろうと考えていました。サンセットコスモスとサボテンではどうにもなりません。ケルロック司祭がご自身で準備したカーネーションを飾って下さいました。

式の翌日、一週間の休暇を貰い、UTAの飛行機でセネガルの首都ダカールに向かいました。たかだか800キロ南下しただけなのに、国境のセネガル川を越えると緑が豊富になります。セネガル川は、ギニア、マリ、モーリタニア、そしてセネガルを流域とする全長1630キロの大きな川です。

市場では花売りが、微笑みながら私の袖を引っ張った。同部族が一団となって静かに暮らすモーリタニア人と違い、セネガルの街は活気に溢れ、商売人は積極的に声を飛ばしてきました。一輪の花を咲かせるのに容易ではないモーリタニアなのに、ここセネガルでは両手に抱える程の花束が300円でした。花屋は、百日草、ハイビスカス、オランダあやめ(学名:ダッチアイリス)、ひまわり、のうぜんはれん(別名:金蓮花)、つるにちそう(別名:ツルギキョウ)などが、四季を通じて咲いていると教えてくれた。一束買って、ホテルの部屋に飾った。ホテル南十字星に滞在した新婚旅行が終わる前日、私たちが市場で買ったのは大根と生姜であった。花より大根、花より生姜。

## 8 土は憧れの存在—イスラエルの乾燥地農業—

国土の60%が砂漠、耕作地は24%に過ぎず、それも北部に集中しているのが中東のイスラエルです。イスラエルは花の生産地として高い評価を受けています。ヨーロッパに近く、輸出高も大きいことから、「花なしではイスラエルの生活は成り立たない」(小林邦宏)とまで言われている。グレヴィレア・ゴールド(Grevillea Gold)はドライフラワーとしての保色性が高いので、日本でもアイテムとして欠かせない存在になっています。

イスラエルは「砂漠の農業」に取り組んでいます。(朝日新聞社文化事業部の高橋友佳里の報告)。「ランクGの砂漠では土に頼ることが出来ない」と心血を注いできた農業技術を、世界のトップクラスと自負しています。500種類の植物を使って研究と実践を繰り返し、たどり着いたのが「水耕栽培」です。足元はサラサラの砂地です。そこで栽培に必要な水と養分の補給に「点滴灌漑」を使います。地中に埋めたパイプから、どのような場所であっても、十分な水と肥料を均等に直接根元に流し込む。期待を担い、育つ、幸せな花・・・。

他方、8歳の子供が生き続けることができるのか、それとも死ぬことになるのか・・・、その瀬戸際で水を求め、ガレキの道を歩き続けている。2023年10月に始まったイスラエル軍によるパレスチナ自治区ガザへの戦闘開始以降、パレスチナの死者は5万人を超えました(2025年4月現在)。イスラエルには司法手続きを経ずに身柄を拘束できる行政拘禁の措置があり、2024年11月には殺人などの罪で12歳の子供に終身刑を科すことができる法律が成立したと聞きました。12歳で・・・、一瞬背筋が凍りました。

学習不足で世界の政治にも、法律にも疎い私ですが、人生には最後まで不安が付きまとうものなのですね。地球人としての共存共栄が遠すぎます。ともかく、年を重ねて益々教わることが多くて、失うプライドなど一切ありません。まだまだ学習の身です。2025年のアカデミー賞長編ドキュメンタリー部門受賞作の「ノー・アザー・ランド」を見て学ぼうと思います。

さて、デザートローズやブラックアイリスなど当地の多くの花は、地中深くに在る水分にアクセスするために、根を深く張り、葉は厚いワックス状の幕を張っています。砂地にビニールハウスを使い、レタス、シソ、パセリなどの野菜も栽培している。この点滴灌漑を開発・生産している会社、今ではエチオピアやタンザニアなどの砂漠地に留まらず、中国やインドなどの大規模工場でも使われているようです。何うに結局、砂漠は砂漠で今までと変わることなく留まるってことなんですね。土壌には関係なく、腕ならぬ草木の根元に点滴を打って、それに要するのは莫大なインフラ投資です。

これってモーリタニア・ヌアディブの我が大邸宅？の庭にテントを張り、なかにプランターを置いて野菜や花を育てるのと五十歩百歩じゃあございませんか？このシステムでは輸出ができませんから、せいぜい隣のマダムをテントに招き入れ、甘いお茶でおもてなしをしながら、「ご覧になって下さい、マダム。遂にサハラで花を咲かせましたよ」と、プランターをお見せするようなもの。“まやかし”や、事実を歪めて一杯食わせる“詐術”とは言いませんが、チョットした論点ズレと言うか、すり替えがございませんか。主張が固定されているからです。「必要な嘘は無外なり」って聞いたことありますが、隣のマダム、「ムッシュー、やりましたねえ」と喜んでくれますか？

イスラエル南部の砂漠は大規模栽培には適していない。ここの土は農産物の生産を支えない。だから何時までも、何処までも土は憧れの存在なのだ。加えて「砂漠の(正しくはハウスで育てられた)植物は、塩分、高温、水不足、窒素不足の4大ストレスを抱える。しかし最新技術をもってすれば、育てられない植物はない」(シモン・ラフミレヴィッチ・ベングリオン大学教授)と明言されているが、その対象は飽くまでも野菜。いかんせん本稿のテーマである花ではないのだ。テーマの花からも離れた展開・・・ゴメンナサイ！

## 9 フィンランドの春—マルガレータと花を育てる—

花のない所・・・サハラ以外にもありました。北極圏です。ユーラシア大陸で一番北にある首都、ヘルシンキの空港から最北の飛行場が在るイヴァロまでの約 1000 キロを移動。そこからは車高があり、タイヤ・サイズが大きい四輪駆動車で移動です。目指すは 300 キロ先のノールウェー北部。マーグロイ島の岬、ノールカップです。岬は高さ 307 メートルの断崖。夏は太陽が沈まない「白夜」、冬は太陽が昇らない「極夜」です。道中は平坦な丘が地平線の奥まで続きます。同行者はフィンランド人音楽家のタピオ・ジャラス(1941)。

テーマの花から外れますが、彼と初めて会ったのは 1969 年 12 月ですから私が 23 歳の時です。ヘルシンキ～パリ間のコンパートメントで一人くつろいでいると、2 メートル近い男が入ってきました。私は初渡欧、タピオには初めての渡仏でした。当時の私はパリ経由で南仏に向かう身で、最終目的地はエクス・アン・プロヴァンス。アルルやアヴィニョン、そしてマルセイユが近い学園都市です。

半年後の翌年夏にヘルシンキへ向かい、タピオ家の一人になりました。長期居候です。タピオの両親がいるアイノラの別荘に行きますと、お父さんのユッシ・ヤラス(1908～1985)が「タピオと仲良くして欲しい」「友達になって下さいね」。傍でタピオのお母さん、マルガレータ(1908～1988)が微笑んでいました。マルガレータは庭にセイヨウノコギリソウ、ノボリフジ、スズランなどを育てており、私は毎日、マルガレータの傍で花づくりのお手伝いです。

冬に出掛けた折りは雪かきにも精を出しました。フィンランドの降雪量は多く、直ぐ玄関の出入りができなくなります。でも私は山形の豪雪地帯生まれ。スコップの使い方などを含め、雪の処理はお手のものです。ユッシとマルガレータは共に 22 歳で結婚、当時は 62 歳です。タピオと私は 29 歳と 24 歳の未だ若者です。(写真下右：左からタピオ、マルガレータ、ユッシ)。



別荘のサロンには渡邊暁雄(1919～1990)の色紙が飾ってありましたが、アレック？逆さまです。コッソリと直してあげました。ユッシ・ヤラスから「私はフ

フィンランド国立劇場の指揮者です。1966年に東京へ行き、日本フィルハーモニー交響楽団でシベリウス(1865～1957)の曲を指揮しました」と伺いました。フィンランド指揮界で大立物のユッシは後に、国立劇場の音楽監督に就任します。著名なピアニストであり、作曲家、ジャン・シベリウスの葬儀(1957)では「テンペスト」を演奏しています。マルガレータはシベリウスの第4女で、花が大好きな、佇まいの美しい方でした。5月の野道にヴァルコ・ヴォッコ(白いアネモネ)を見つけ、私たちはフィンランドの春に浸りました。マルガレータは5月に咲くコリダリス・ソリダ、5～6月のツマトリンソウ、ハート型の葉が可愛いヒメマイズルソウが大好きでした。

音楽の話になりますが一、ヘルシンキに在るユッシの自宅に行くと父のピアノ伴奏でタピオのフルート練習が必ず組み込まれておりました。この2～3時間は至福のひと時でした。ジャン＝ピエール・ランパル(1922～2000)に師事していたタピオ、彼が来仏時には我が家の一員になります。コンセルヴァトワール(パリ国立高等音楽院)からピアノ奏者が来宅し、家族向けの演奏会です。パリ滞在時のタピオと行動するなか、ランパル国際フルートコンクール(1980年創設)があつて、フルーチストの工藤重典(1954)や加藤元章(1957)とも面識を持ちました。が、タピオを含む御三方の師匠であるランパルが、ピアノなどと同様にフルートを、大聴衆の鑑賞に堪えられる楽器として認識させた最初の演奏家であること、20世紀で最も偉大なフルート演奏家と認められていたことを、不勉強で知りませんでした。私のランパルは、「いつも愉快な人」に留まっていました。(こういう見識は恐ろしい)。ユッシの願いごとは金科玉条、タピオ家とは半世紀を経た今も、ファミリー付き合いをしています。

フィンランドの国土面積は日本とほぼ同じですが、四分の一は北極圏です。人口は551万人と我が国の5%、国の人口が東京都の半分に満たないのです。首都ヘルシンキも人口は64万人ですから東京都大田区とほぼ一緒。このようなスケールですが、国連の「世界幸福度ランキング」では7年連続一位(2025)です。政治の透明性、社会的支援の充実、質の高い教育や医療が評価を得ていますが、それは社会保障などの制度や社会環境の良さと信頼に基づくものです。また、フィンランドには「自然環境との共存」を旗印に、自然の享受を認める「自然享受権」という法律があります。これによって、他人の土地への立ち入りが認められております。人口の割に広い国土を持つ国であることに依拠しているのかも知れません。それでも不思議な光景を思い出します。

「自然の中で、自然と共に、自然に暮らす」はフィンランド人のモットーとするとところですが。友人のタピオも、手を掛けて果物をつくり、花を咲かせることなどしておりませんでした。レッドチャンピオンを道路沿いに見つけては厳冬に入る前の短い時間を堪能していました。

或る日、タピオと散歩をしていた時です。彼は畑にリンゴを見つけると小走りに入り、もぎ取って食べ始めました。(アレッ？食べてる！)人の手が入って

いないので小さなリンゴでしたが、これって自然環境との共存を重んじる「自然享受権」のなせる業でしょうか。その時のタピオの目は悪戯っ子そのものでしたが・・・分かりません。ただ彼は、こんなことを語っていました。

シベリウスの家系には音楽家が少ない。要因の一つに、「子供たちがバイオリンやピアノを弾くことが出来たのは、シベリウスが外出している時だけだった」(タピオ)ことが考えられます。シベリウスは日によって機嫌が変わる激しい性格の持ち主で、その理由は「作曲の期限を守ることが出来ず、それを繰り返しては落ち込む苦しみ、そして孤独から鬱病の傾向にあった」とタピオの妻、ヴァルプから聞きました。菅野浩の『シベリウスの生涯と作品』(音楽友之社)には、1957年9月29日の国家的な大葬儀までを詳述しています。

シベリウスが38歳から半世紀余りを過ごしたヘルシンキ近郊のアイノラ荘。そこにあるピアノには、今もベートーベン像が置いてあります。像を指して孫のタピオに「うるさくすると、これがお前を食べるぞー」と怒ったとか。タピオには甥の厳しい怖い御爺さん、悪戯っ子だったとは思えないが・・・。

フィンランドの国花はドイツスズランです。北海道で咲いている花より少し大ぶりで、強い香りがあります。夏の風物詩となるスズランですが、「美しい花には棘がある」を地で行く危険な花。体内に入れば死に至る猛毒を持っています。フィンランドの道端でよく見かけるのは、タンポポ、ヒナギクです。

さて、ここノールカップは、ヘルシンキ郊外のタピオ家から千数百キロ北です。徐々に木の長けが低くなり、暫くすると草花は一切なく、周りの植物は数センチの苔だけに。タピオから借りたセーターを重ね着し、厚手のコートで包んでも震える。寒い。否、冷たい。今は8月なのに。ここに花はありません。暑くても寒くても咲かない花。だから私は、雑草に咲く花も愛おしいのです。

## 10 花卉の供給サイド

我が国の国土面積は3.780万haで、耕作地面積は437万ha(11.6%)、そのうち稲作用の田が235万2.000ha、畑が197万3.000haです(令和6年版『土地白書』(国土交通省、2024)。農業を主な仕事としている「基幹的農業従事者」は2023年で116万人ですが、これは2000年の240万人から半減です。その平均年齢は現在69.2歳で、2040年の農業従事者は30万人まで減少すると見込まれています。(令和6年版『食料・農業・農村白書』(農林水産省、2024)。

「農業を続ける、やめる」で揉めているのは全国どこも一緒のようです。故郷からは「子供たちが農業は継がないと言い出して、こちらから『やれ』とは言えないし・・・」と嘆く声。もう10数年前から聞こえています。

私が生まれ育った山形県の辺境の地、幼い頃の田は人で埋まっていました。小学校低学年時は花を摘み首飾りを作って遊んでいましたが、4~5年になると環境は激的に変化します。複式授業の小規模校(2018年3月廃校。1984年に中学校・分校が廃校になっており、これで義務教育機関はなくなった)なのに、

教室から一人、二人と消えていきます。農繁期になると人海戦術になり、大人と一緒に働かされるのです。私も母の実家で田んぼに入り、怒鳴られながら牛を誘導しました。土を耕す犁(すき)を引かせて田起こしをする代掻きですが、陰湿なムードでした。直ぐに田植え、除草、そして稲刈りまでは家族総出の手作業です。この状況は「花より団子」ならぬ、勉強より農作業ってことで、これが故郷の原風景です。それが機械化された現在は農作地で人を見るなんて稀の稀。しかもトラクターなどの機械や燃料費ほかの経費高騰もあって、最近耳にする“農家の時給 10 円”は誇張ではなく現実のようですね。すみません！70 年前の農作業風景を思い出していたら、流れがこんな風になって・・・。

日本の農業は中山間部を丹念に耕してきた、9 割を占める小規模農業で成り立っております。そんな田舎では牛馬が頼りで、この大型家畜が農作業を担う主役です。牛馬が命綱であり、子供目線から見ても、食事への対応、顔を撫でている時の可愛いがりよう・・・その寄り添う様は自分の子供に対する接し方より上という感じを抱きました。獣医も沢山いて忙しくしておりました。子供もかような様子を日常的に見ており、牛馬の大切さを感じて育ちます。

当時の農業従事者は牛馬を見詰め、こんな心境でしょうか。聞き流して下さい。悪ふざけしている訳ではございません。

♪あなただけが～ 生きがいなのよ～  
お願い～ お願い～ 捨て～えないで～

そして、70 年経た 2025 年 3 月 30 日、主食のコメを特にアメリカからの輸入に頼ることへのリスクや食料供給体制への不安を掲げ、「東京の人は農家の窮状を知って欲しい」と、14 都道府県で「令和の百姓一揆」がありました。一揆を告げる“ほら貝の合図”で、約 30 台のトラクターが花冷えの渋谷や原宿を、ドドドド・・・、ボボボボ・・・と 5.5 キロ行進し、騒然となりましたね。

拙稿がテーマの花卉ですが、その作付面積はピーク時の 4 万 8,000ha(1995)から 2 万 4,000ha に減っています(注 11)。米作りをしながら花卉栽培に取り組む兼業農家がありますが、それも含め花卉生産販売農家数は 5 万 2,000 戸(2015 のデータ)、花卉産出額は 3.519 億円です。花卉業界も生産者の高齢化に伴う労働事情で規模の縮小化が進んでいます。花卉栽培は広い農地面積を要しないので、多くは新規参入者を含む若い世代になっています。

農水省は「物流の 2024 年問題」に対応した花卉流通の効率化、需要の高い品目への転換や導入、病虫害被害への軽減など、産地の課題解決に必要な技術導入の支援を図り、花卉需要の回復に向けた取り組みを支援することとしています。(出典：「作物統計調査―花卉の現状について―」(農林水産省、2020)および、令和 6 年版『食料・農業・農村白書』(前掲)。

「第 36 回「大きくなったらなりたいもの」(第一生命、2025、3)を見ると、

小学生女子の部は、1位 パティシエ、2位 会社員、3位 漫画家、4位 医師、5位 歌手、6位 看護婦、7位 教師、7位 ヘアメイク アーティスト、9位 公務員、9位 料理人。アレ・アレツ、花屋さんがいつの間にか、なくなっている！小学生女子の部では、必ず上位に花屋さんが選ばれていたと思うんですが。あの夢、あの思いは何処へ行っちゃったのだ。寂しいです。

全国生花小売店舗数(法人事務所)ですが、8.011 という数字があります。これは、店頭販売(6.297)、訪問販売(122)、通信カタログ販売(158)、インターネット販売(667)、自動販売機による販売(34)、その他の販売(73)を加算した数字です。これに1万1.610の個人事業者を加えた、1万9.646が全国の花卉小売り事業所数となります。(出典；農林水産省、経済センサス)

結婚式や送別会などのイベントが減り、行き場を失った花が廃棄処分される「フラワーロス」が問題になっています。上述の物流の効率化に取り組まないと、労働力不足による物流需給が圧迫し、2030年には9.4億トンの輸送能力不足が起きると懸念されてもいます。(出典：NX 総合研究所試算)。流通の問題や小売店が仕入れた花の40%が行き場を失って廃棄されることで、年間の経済損失は1.500億円とも3.000億円とも聞きます。花の小売価格が高騰する要因です。

生産管理に多くの水と電力を使用する花卉栽培、SDGs(持続可能な開発目標)が掲げる「つくる責任、つかう責任」の観点からもフラワーロスには早急な解決が待たれています。1世帯あたり年間の切り花購入額は13.130円(1997)をピークに、現在は8.401円(総務省統計局)まで下がっています。資源価格の上昇や円安の進行で物価高が止まらず、消費は落ち込み、“風流より実利でしょ”とばかりに「花より団子」の状況でもあります。

## 11 商品管理が難しい花

花屋さんは全国に約2万軒あります。そこで私たちが購入時の小売価格に占める花卉の、流通段階別受取額の割合はどうなっているのでしょうか。大掴みになりますが、生産者が3割、集・出荷者が1割、小売り店舗が6割です。小売りの受取額が小売価格の6割と高いのは、花束のラッピング、フラワーアレンジメントなどの加工経費・技術料を要すること、繰り返しになりますが、花卉は鮮度の劣化が早いために仕入れ商品の約半数は売れ残りとして廃棄処分される、かような商品ロスに依拠しているんですね。商品管理が難しいビジネスということです、花好きの私が口ずさんできた言葉を思い浮かべます。

花の命はみじかくて  
苦しきことのみ多かりき  
林芙美子

花には生き物としてのアイデンティティーがあります。トゥモロープラザ歯科院長の服部保宏は、院内に胡蝶蘭を育てています。胡蝶蘭が持つ非日常的な優雅さに私は圧倒されています。一本いっぽんに在る自己主張が分かる服部は、その品格ある花に水やりの際は「美しいね」「綺麗だね」と声を掛けるといふ。状況が把握できない私を察して、やおら「奥さんに言っているでしょう」。(ア・ア・ウ・・・、先生、麻酔を打って治療をお願いします)。

全ての花は、その形、鮮度が異なります。これは流通上、多品種少量品の入荷・販売の繰り返しから煩瑣で、機械化できる領域が少なくなることを示しています。マニュアル化人間の功罪が話題になりますが、花は個々の自己主張が強いのです。

我が家を飾るのは戴き物の啓翁桜(写真左)と、プリザーヴドフラワー(preserved flowers=加工保存された花、写真右)です(注 12)。



私たちは買い物をする時、じゃが芋も白菜も吟味し、賞味・消費期限まで見た上で、一つひとつ選んで籠に入れます。魚だってシッカリ見てから店員さんに「これを下さい」となるのに、花屋さんは、野菜、魚、或いは果物のように、自由に選ばせてはくれません。花を触るなんて言語道断、沙汰の限りってことです。花は対面販売の最たる職業ともいえる所以です。

このような制約は花が持つ特性であり、私たちは、その特性から生じるサービス、価格、利便性などを総合的に見て花屋さんを選ぶことになります。そこには少しばかりの緊張感も漂います。買い物は買い物でも、私なんぞにはチョットばかり、他業種とは異とする緊張感が拭えません。店舗の大型化を考えても、頻繁に花の先入れ先出しを行うことになります。大型店では物流システム上、花の鮮度を保つのが難しく、どうも事業の拡大には馴染みません。そこで比較的小規模店舗のチェーン化になります。

花を取り巻くインフラとしての周辺産業にも目を向けましょう。切り花や園芸用品の開発・生産・販売に携わるメーカーがあり、年季の入った職業人がおります。例えば、フェンスやプランター、そして、ウサギ、犬などの置物をつくるメーカーです。赤玉土、ピートモス、バーミキュライトを生産する園芸用土のメーカー、葉面洗浄剤、忌避剤、肥料、植物成長調整剤、殺虫剤、殺菌

剤、除草剤、展着剤などを生産する薬剤メーカーもあります。じょうろ、園芸手袋、農薬用マスク、園芸用メガネなどの生産に関わる用具・用品メーカーも…。花卉流通には農業資材メーカー、物流や情報関連企業、鮮度保持資材メーカーも関わります。

## 12 内外のフラワーショー

我が国には毎年、新品種の花が輸入されております。もちろん国内でも新品種が開発・生産されています。新しい技法を取り入れたアレンジメントもお目見えしております。このような環境下で、花を中心としたイベントや見本市も少しずつ変化を見せながら継続してきました。かつては、生産者、流通業者、花屋など、花を扱う企業会員を対象に個別の展示会が行われていましたが、近年は総合見本市のように規模が拡大されてきております。

海外では、オランダ、ドイツ、イギリスを中心に展開されています(注 13)。一例としてイギリスのチェルシーフラワーショーを取り上げます。主催は王立園芸協会(1861 年設立)で、毎年 5 月に、4 日間開催されます。会場は 1913 年からロイヤルホスピタルで行われており、入場者は 5 万人を数えます。展示内容は植物の他、果物、野菜、温室、園芸関係、アレンジメントの展示、花に関わる物の販売と広範囲にわたります。

日本では最大級と言われる、公益社団法人日本家庭園芸普及協会主催の「横浜フラワー&ガーデンフェスティバル」(みなとみらい 21・パシフィコ横浜)が毎年、5 月の連休時に開催されます。このフェスティバルは 1991 年にスタートし、今日に至っております。ショーガーデン展示、園芸資材の展示、体験型ワークショップ、フラワーデザイン教室、ガーデニング教室、トークショー、園芸セミナー、デモンストレーション、ガーデニングコンテストと、その内容は豊富です。我が国では毎年各地で開催されている、花と緑のイベント、フラワーショー、フェスティバル、見本市、展示会と呼ばれるものが数十回、これらとは別に、蘭展が 10 回程度行われております。

オランダの「キューケンホフ」と、国内の「フラワー&ガーデンショー」を比較して長山尚代は、会場設定の違いを指摘しています。「オランダでは大きな庭園を会場に設定し、必要であれば各ブースにテントを張り、より開放的な環境で運営されている」と述べています。そこにはレストラン、喫茶店などもあって、会場の芝生には寝転んでいる姿も見られるとか。来場者の殆どは家族連れで、一日のショーを楽しむ感覚です。

日本でも自然が育んだフラワーを扱う以上、より自然空間を取り込んだ展示方法が良いのでは一、内外の事情に精通している長山はそう説示しています。私の知るオランダは水と緑が豊かで、国自体が花園の雰囲気。かつて 1 万基あった風車は数百基が観光資源として残るのみですが、立ち並ぶ家は、おとぎの国そのもののデザインです。

## 13 インフラを支える人

造園工事業の従事者は6万5,000人、工事高は7,000億円と推定されています(国土交通省、一般財団法人建物物価調査会、2020)。生け花を教える人は250流派の3,500人(公益財団法人日本いけばな芸術協会、2024)、フラワーデザインを教える人が8,000人(公益社団法人日本フラワーデザイナー協会会員の講師、同上)おります。花や緑を職業としている人たちです。これに趣味や教養、教育、娯楽としてフラワーを学んでいる生徒、数百万人(と考えられています)が加わります。時代環境で大きく変わる世界ですが、花を楽しむインフラを支えている方々です。

洋服に付けるコサージュを作ったり、友人の結婚式に手づくりのブーケをプレゼントするなど、若い女性を中心に花の消費が増えています。アレンジメントの教室に通う人々も、趣味の域からプロを目指す人まで様々です。長山がロイヤルフラワースクールの助教授時代に、大森・大塚・横浜・大宮・銀座・青山/原宿・船橋の各校で行った調査では、フラワーアレンジメントを始めた切っ掛けに、技術の向上よりも「花が好きだから」を挙げた人が圧倒的でした。花を通して得る、安らぎ、潤い、情味、充実感です。

欧米のデザイナーが来日してその技術を伝授していますが、日本から現地に掛けて学ぶ人もおります。長山尚代も何度か渡欧するなかで、日本の〈居間文化〉に合ったスタイルの確立に努めてきました。花はバイオ化や輸入で、シーズンを問わず入手し易くなっております。花の歴史は行事の簡略化から、別様式に変換することも示しております。

私たちの生活に寄り添う生け花が、進化しながら、或る時は類似化・同化に至るように、領域が明確に区分しにくくなっているのです。思えば類似化・同化も、文化産業(注14)として業界発展に向けた、「文化資本(注15)に依る新しい花文化」の発生であるかも知れません。改めて申し上げたいことは、財があれば物事が動くと考えるのは錯覚で、原動力として動くのは文化です。文化資本が経済活動のエネルギーとなる、根源的な力だと思うからです。

## 14 花を楽しむウォーキング

花が絡む私のささやかな日常です。季節によりますが6時から1時間ほど、東京都下の一級河川、浅川の堤防を歩いています。浅川は9つある多摩川の支流の一つ。辺りには田畑が残っており、のどかな空気感が漂います。

浅川の流れは大人しやかで穏やか。「水の宝石」と呼ばれるカワセミが「チッチ」「チチー」と鳴き声(鳴き交わし、求愛給餌)を上げています。鷺(さぎ)は長期にわたり親に育てられることから、自ずと集団生活になるようですね。魚、カニ、蛙などを捕食しています。

雉(きじ)は平地から低山の草原、太陽光が木々の間から地面まで差し込む疎林(そりん)を好むので、当地の自然がお気に入りのようです。立木がまばらな所が好きなんですね。独り善がりではありますが、カワセミに“愛らしい美”、鷺に“上品な美”、そして雉に“華やかな美”を感じています。

多摩川と合流する地点から約7キロ上流です。ここには人と犬の清々しい老々介護があります。80代という御婦人が「この犬、もう17歳なんです」。あるいは「この犬、目が見えないんですよ」。そこにある、美しい、ほのぼのとする関係。喜びや悲しみを共有できる仲間として、犬と共生している人がいます。友人・知人、あるいはモノでは埋められない孤独感、それを補う犬が多いことを教えてくれるのも浅川堤防の散歩道です。

30キロ先の富士山が大きく見え、足元の傍らには花が咲き誇ります。ここに咲く花々は堤防を歩く人を勇気づけ、それはマラソンの折りにゴールまでランナーを応援する沿道の人々に重なります。堤防に向かう途中にも数か所、花壇があつて、手入れが行き届いています。あちらこちらで見る花が繋ぐ絆。花のケアをされている地域の方々には、いつも敬意を表しております。

そして月例のウォーキング(注16)は、箱庭と盆栽のプチ文化から飛び出す「健康づくりウォーキングの会」。そこではリーダーの秋田叔彦とサブの吉田武司が、私どもの前後を守っています。春から秋にかけての季節には花が咲いている場所を確認しながら、6~7キロのコース(注17)を設定しています。トイレ及び小休憩箇所を予知(すでに立派なヨタヘロ族には、これが大事!)した上で臨む二人と、彼らを補佐する指導員が数名おります。



私は歩を進めるのも厄介な身体ですが、ある日、指導員のお一人が近づいて来ました。柔らかい口調で「前の皆さんと少し離れてしまいましたね」。表情も言葉遣いも優しいのですが、その分、凄いプレッシャーを感じます。これがウォーキングから落ち零れる前触れなのか。勘弁してくれー。

指導員は私から離れ、軽い足取りで前方に移動しました。私には折角の花を楽しむ余裕がありません。そういうウォーキングが、最近続いています。これ

では幹部がつくった企画が台無しです。数年前までは特段に【健康】なんて考えておりませんでした。早朝散策に一層の負荷を掛けて鍛えよう。

ウォーキングから戻り、新聞紙上で《今日の運勢欄》を見ました。「指導して貰えるうちが花である。くじけずに向上すべき時」とありました。

私たちは最も小さい病気も  
感じるくせに  
完全な健康は少しもこれを  
感じないのである

モンテーニュ・関根秀雄訳『回想録』

私たちはJ・ラスキン(1819～1900)が主張する、野性的で変化に富み、多様性と生命力に溢れた自然の美術館に足を踏み入れ、そこから得た成果を生活の利便性を高めることに取り入れてきました(4項「花とともに生きる」を参照)。花が主体の自然の「鑑賞」と、体が主体の(私の場合は何とか持ち堪えている)「健康」、この双方の相互作用に空想力と想像力は生まれます。

例えば、花の観察は共感を生み、生きがいとなって人間関係に活かされるようになります(注18)。池上惇は「生きがい、健康に関心を持つようになると、自分の生存の基盤や将来の方向を考える切掛けが生まれる」と示唆しています。生活の質に対する消費者の欲求が高まれば、それに応えて生産の質量も高まります。この双方向のコミュニケーションを持続させるキーは健康です。

発展と言う名のもと、自然がどんどん壊されていくのを目にします。ここに豊かさがあるのでしょうか。もう30年以上前から「持続可能な開発のための指標」を耳にしております。経済の発展は国家の建設と同時に、人々の福祉と健康を増進するものであるべきと思っています。

GNPって何ですか？水質が悪いから浄水器を購入しました、座礁したタンカーの石油流出物を処理するのに政府がお金を出しました、工場を建設するために森林を伐採しました・・・生態系を破壊しながら全てプラスに加算するGNPは、「国民が豊かになった」と勘定する、架空の数字でしかありません。

そういえば、「グリーンGNP」「グリーンGDP」って耳にしなくなったような気がします。私の耳が遠くなった？目が悪くなった？ああ、それもあり、です。

年々歳々花相似たり

歳々年々人同じからず

劉延芝



ウォーキングは地域に於ける四季折々の自然の固有性への尊重や、人間の多様な主体が持つ個性の共存を目指すという観点からは逃れ向きで、人間の優れて文化的な営みとも言えるでしょう。

秋田と吉田が中心になって運営する「健康づくりウォーキングの会」が果たす大きな役割です。2025年4月のテーマは「羽村堰・チューリップ畑・桜・玉川上水など盛沢山なウォーキングを楽しもう!」。ヨタヘロ族に気懸りな空模様ですが、当日は快晴。桜が例年通り咲き揃い、チューリップが微笑むウォーキング日和でした。(文中の敬称略)

## 注

(注1)奈良時代(710～784)には梅が栽培され、平安時代(794～1185)には白川女と呼ばれる花売りがいた。花を生ける習慣は室町時代(1392～1573)に根付き、花卉園芸の急激な発展が見られるのは江戸時代(1603～1868)である。戦国時代(15世紀末～16世紀末)に確立した茶道や華道は多種多様な職能集団を生んだ。家庭教師として武家屋敷に花や教材を持ち込み、対価を得て、その技術も広まった。都市近郊の生産者や花問屋から仕入れて歩く花売りのような業種の分化を生み、後々、花の流通が確立されることに繋がった。白幡洋三郎『大名庭園』(講談社)、青木宏一郎『江戸のガーデニング』(平凡社)に詳述。

(注2)植木屋：樹木を育て、庭石、池、そして水路で構成する庭園を造る職人。花売り：植木、盆栽類を薬師・観音・不動の縁日の露天で、或いは小さな根付きの植木を竹もっこ(藁、竹などを網状に編んで作った容器)に乗せ、両天秤で売り歩く行商。店を構えている花屋の主人が、手車を引いて売り歩くこともあった。



石屋：石山から石を切り出して運ぶ人夫、或いは全国の石材を仕事場に置き、注文に応じて加工する職人。石工：石を刻んで細工をし、灯籠や墓石を造る職人。石塔師：石工のなかでも墓碑を造る職人で、道具の石鑿(いしのみ)は自ら作り、石の硬さに合わせて15～6種類持っていた。「石磨き3年、道具作り3年、作り3年」と言われ、一人前になるには10～15年の修業が要求された。植木売り：四季折々の植木を肩に担って売り歩く。槌田満文編『江戸東京職業図典』左上より時計回りに、花売り、同、植木売り、石工職、植木屋、pp.62、117、33、62、22(東京堂出版)。白幡洋三郎『庭園の美・造園の心』(日本放送出版協会)に詳述。

(注3)1. アレンジメント：広い意味で、コサージュ、ブケを除く花の造形(用途：玄関、食卓などの演出、ウィンドウ・ホールなどのディスプレイ、入学・記念日などのギフト)。2. ブケ：花を束ねたもの、花束の総称(用途：花嫁のブライダルブケ、お祝い、プレゼントのギフト)。3. コサージュ：身に付ける装いの小さな花束の総称(用途：花婿のブライダルブトニア、フォーマル用のブローチ、ヘア・リストなどのオーナメント)。4. プティ・デザイン：幅・奥行・高さを其々9インチ以内に限定した小品花(用途：インテリア・ディスプレイなどの鑑賞)。5. フローラル・コサージュ：平面的に植物素材を貼って画面構成したもの(用途：インテリアなどの鑑賞)。6. ドライフラワー：相応しい花に、バラ、ビオラ、千日紅、紫陽花、アナベル、水無月、スターチスなど(用途：地域的、季節的に生花が飾りにくい時の代用。唐辛子、ニンニク、栗などは食用と併用される)。7. コンテナガーデン：植木鉢以外の鉢物に数種類の花、草、木を植える(用途：ミニガーデンのように庭のない所や室内の置き鑑賞用に応用。長山尚代、佐々木「フラワーデザインと生活」『文化経済学会〈日本〉年次大会 福岡大会予稿集』、p.76、文化経済学会〈日本〉)。

(注4)サウジアラビア：見舞い(60.6%)、結婚祝い(57.7%)、その他記念日(53.5%)、出産祝い(49.3%)、結婚記念日(42.3%)、卒業祝い(42.3%)、誕生日(39.4%)。UAE：結婚記念日(60.8%)、誕生日(50.0%)、その他記念日(48.6%)、見舞い(48.6%)、結婚祝い(44.6%)、出産祝い(40.5%)、訪問時の手土産(39.2%)。資料：農林水産省。

(注5)1月(梅、松、福寿草)、2月(椿、梅、水仙)、3月(牡丹、沈丁花、菜の花)、4月(ソメイヨシノ、山櫻、チューリップ)、5月(木蓮、藤、カーネーション)、6月(花菖蒲、ザクロ、紫陽花)、7月(グラジオラス、山百合、向日葵)、8月(朝顔、百日紅、ススキ)、9月(萩、葵、彼岸花)、10月(コスモス、リンドウ、菊)、11月(クちなシ、サザンカ、ビワ)、12月(椿、桐、ケシ)。なお花暦は、季節や気候に応じて、そして花の概念も時代とともに変化し、地域によっても違いが見られる。八坂書房編『花カレンダー 花ことば』(八坂書房)、『大辞典』(平凡社)に詳述。

(注6)1. 国花：エジプト 睡蓮、南アフリカ キングプロテア、ガーナ ナツメヤシ、トルコ チューリップ、イギリス バラ、フランス マーガレット、ヤグルマギク、ヒナギク、オランダ チューリップ、ドイツ ヤグルマギク、オーストリア エーデルワイス、ポーランド

パンジー、中国 牡丹、北朝鮮 大山蓮華、インド 蓮、ネパール シャクナゲ、マレーシア ハイビスカスなど。2. 州花：アメリカは独立記念日直後から各州それぞれが、その土地の特産種ないし州民から最も親しまれている鑑賞花卉を州歌として選んだ。アイオワ州 野バラ、カンサス州 ひまわり、ニュージャージー州 紫すみれ、ハワイ州 ハイビスカスなど。3. 都道府県花：北海道 ハマナス、青森 リンゴ、岩手 桐、秋田 フキノトウ、山形 紅花、宮城 ミヤギノハギ、福島 ネモトシャクナゲなど。山形県の紅花の原産地はエチオピアで、日本には飛鳥時代に中国の呉から渡来した。紅用として16世紀に山形県が特産地となり、江戸時代に生産が盛んになって県花に。紅花に含まれる色素は布や紙の染色、食品着色料として使用され、高校駅伝の襷は「山形の色」として定着している。塚本洋太郎監修『花卉園芸大辞典』（養賢堂）に詳述。

(注7) 言わぬが花、梅に鶯、牡丹に唐獅子、花より団子、枝をたわめて花を散らす、美しい花にはトゲがある、埋木に花咲く、月に叢雲(むらくも)花に嵐、立てば芍薬 座れば牡丹 歩く姿はユリの花、花のかんばせ、錦上に花を添える、解語(かいご)の花、生きる木は花から違う、花咲く春にあう、柳緑花紅(柳は緑 花は紅)、綺麗な花は山に咲く、死んで花実が咲くものか、親の意見と茄子の花、陰裏の桃も時が来れば花咲く、花多ければ美少なし、薪に花、遠きは花の香り、泥中の蓮、やはり野におけ蓮華草、ハコベの花が閉じると雨になる、いずれアヤメかカキツバタ、朝顔の花一時、落花狼藉(らっかるうぜき)、世の中は三日見ぬ間に桜かな。小林忠雄、半田賢龍『花の文化史』（雄山閣出版）に詳述。

(注8) ①部屋が明るくなった、②優しい気持ちになった、③リラックス出来た、④季節の移り変わりを感じた、⑤空気が綺麗になった、⑥気持ちが晴れた、⑦プレゼントをした相手と絆ができ、感謝の心が芽生えた、⑧やる気がでた。資料：「令和2年度花卉の需要開拓に繋がる調査報告書」（農林水産省農産局）。

(注9) ハンキング園芸：小さな庭と見立てたハンキングバスケットに草花を植え、空間を立体的に飾って楽しむ。用いる花に、ビオラ、パンジー、サフィニア、ミリオンベルなど。コンテナガーデン：球根や宿根草の植え付けが可能になる植物栽培用の容器を使った花づくり。用いる花に、マリーゴールド、パンジー、アイビーなど。トラフガーデン：レンガ、発泡スチロール、モルタルなどでトラフ(穴を開けて花を植え付けられるようにしたもの)をつくり、ミニ草花を植える。トピアリー：樹木を幾何学形や、鳥、キリン、象など動物形に刈り込む。縁起物として鶴亀や宝船も多い。ヴェルサイユ宮殿などヨーロッパの宮庭庭園では、左右対称にデザインした形が多く見られる。イタビカズラ、フィカス プミラなど、つる性植物を金網でつくった基本形に這わせ、四季を問わず鑑賞できる。アクア・プランツ：水中ガーデニングとも呼ばれ、透明の水槽に草姿や葉色が異なる水性植物を植え、照明を施して部屋のインテリアとして使う。水槽に流木や小岩石を配し、熱帯魚を入れてアクアリウムにもできる。数百種類の南米やアジア産の熱帯性水性植物が輸入されている。塚本洋太郎総監修『園芸植物大事典』（小学館）、亀山章編『造園大百科事典』（朝倉書店）、農林省熱帯農業研究センター編『熱帯の有用作物』（財団法人農林統計協会）。

(注 10) モーリタニアに於ける日経企業の活動や駐在員の生活は、財団法人昭和経済研究所 Web マガジン、佐々木『砂と海と太陽と一サハラでの挙式ー』2024 年 6 月号に詳述。

(注 11) 花卉の作付面積及び出荷量(2022) 単位：面積アール/出荷量 1000 本(玉・鉢) ①切花類 1.297.000/3.139.000, うち菊 409.200/1.227.000, 切り株 3, 58.900/202.100, ユリ 63.500/109.900, 切り葉 56.400/86.200, りんどう 39.600/73.100, ばら 26.900/188.700, カーネーション 23.700/191.500, ②球根類 23.400/70.500, ③鉢物類 145.200/181.300, うち花木類 29.000/31.200, 観葉植物 25.700/40.800, 洋ラン類 16.800/11.900, ④花壇用苗もの類 125.300/535.100。資料：農林水産省「作物統計調査(花卉生産出荷統計)」。

(注 12) 啓翁桜は一足早い花を咲かせる【みちのくの初桜】。昭和初期に山形県の園芸農家・伊藤伊三郎に依って誕生した。冬の間に蕾の休暇打破を起こし、温かい室内環境に移して開花を早める。蕾が開花すると薄紅色の花が咲き揃い、ほのかな香りと共に華やかさを醸し出す。花持ちは約 2 週間。プリザーブドフラワーは、フランスのヴェルモント社が特殊保存技術を発表(1991)、フローラルデザイナーが利用して広まる。メリットに、①花粉が周辺を汚す心配がない、②水やり・水交換の手間が不要、③生花時の瑞々しさを長期間保つ。デメリットに、①加工を要するため高価、②生花環境より破損し易い、③香りが楽しめない、④湿気や強い紫外線に弱い。なお、啓翁桜は山形県川西町大舟郵便局長の山口喜吉、プリザーブドフラワーは、マクロビオティック料理、スコットランド食文化研究家の野口結加から頂戴した。資料：山形県農林水産部/flannerica・熊本。

(注 13) オランダ：ガーデントレードフェア(ガーデン用品の展示)、球根花展示会(球根のショーと展示)、キューケンホフ(公園解放、花の展示)、オランダ園芸トレードフェア(園芸機械類、種苗の展示)、国際花卉演芸見本市(切り花、鉢花の展示)。ドイツ：フランクフルターメッセ・プルミエール(ペーパー、ビューティー、クリスマスカード)、IPM エッセン国際園芸見本市(観葉植物、関連技術の展示)、フランクフルターメッセ・アンビエンテ(テーブル、キッチン関連の展示)、フランクフルターメッセ・テンデンス(テーブル、キッチン関連の展示)、ガーファ・ケルン国際ガーデン専門見本市(グリーン産業中心の展示)、イギリス：ハロゲート・スプリング・フラワーフェスティバル(花のイベント、展示)、チェルシーフラワーショー(園芸用品、アレンジメント展示)、ハットフィールドハウス園芸フェスティバル(アレンジメント、イベント開催)、ハンプトンコートフラワーショー(花と庭園のショー)、ウイズリーフラワーショー(幅広いジャンルの展示、販売)、リーズキャッスルフラワーフェスティバル(花店の技のエキシビション)、シティ・オブ・ロンドンフラワーショー(果物、植物の展示・販売)。以上、長山尚代、佐々木「フラワーショーの海外/日本の実体」『文化経済学会〈日本〉年次大会 長岡大会予稿集』、pp. 82～85、文化経済学会〈日本〉。

(注 14) 経済と文化は相互依存し合っている。一つは経済の文化化、或いは企業の文化化で、もう一つは文化の経済化、或いは文化の市場化である。換言すれば、文化的欲求の充

足が市場を通じて行われる、文化の産業化である。背景に余暇活動の拡大、心の豊かさを求める価値観の転換がある。ライフ・スタイルの多様化・個性化は、サービス経済化を更に促進させ、文化産業が発展する土壌となる。山田浩之「文化産業の発展」は山田浩之、池上惇編『文化経済学を学ぶ人のために』pp. 96～109(世界思想社)に詳述。

(注 15)そもそも経済活動は文化力の表現であり、文化を創り得てこそ利益が生み出される。文化利益を生んでこそ成長が期待できる。実業界の発展には、人材の潜在的な文化能力の高揚が不可欠なのである。即ち、組織体に文化資本が形成される雰囲気が必要であり、「文化を経済化させる」現象が文化産業として現れてくる。金武創・阪本崇『文化経済論』pp. 132～134、pp. 139～144(以上、阪本)、p. 244(金武)、池上惇・植木浩・福原義春編『文化経済学』pp. 12～14(池上)、pp. 88～89(山田浩之)、p. 197(植木浩)に詳述。

(注 16)生活に運動を取り入れ、効用(楽しさなど)を享受する。この現象を「行うスポーツ」とすれば、スポーツの持つ強さ、爽快さ、明るさなどをデザインしつつ機能性重視でつくられているウェア、シューズなどは「着るスポーツ」で、タウンウェアとしても楽しめる。スポーツのファッション化現象は清涼飲料水にも見られ、「飲むスポーツ」は花盛りである。スポーツの持つ楽しさ(文化性)を多様な形で生活に取り入れる現象と捉えれば、この多様化がスポーツの経済化を進展させていることになる。「見るスポーツ」の行動、“観戦行動”は傍役の主役化となって多くの人に注目され、メディア・ヴァリュとしての価値を生む。大鋸順『スポーツの文化経済学』pp. 6～19(芙蓉書房出版)に詳述。

(注 17)2025 年 3 月 13 日：初春の小山田緑地を歩こう、2025 年 2 月 13 日：早春の野川公園で春を探そう、2024 年 12 月 12 日：新田義貞由来の緑道と古戦場を尋ねて、2024 年 11 月 14 日：緑豊かな多摩の公園と緑道を巡る、2024 年 10 月 10 日：武蔵国分寺の史跡と豊かな湧き水を巡る、2024 年 9 月 19 日：南浅川周辺の緑と清流を巡る、2024 年 6 月 13 日：玉川上水と神田川を巡る井の頭公園までの木陰の路、2024 年 5 月 16 日：新緑のせせらぎ緑道と尾根緑道(戦車道路)を歩こう、以下略。

(注 18)人間は日常性の中に埋没していると、生命と生活の充実、特に、生きがいや健康などに関心を持つことが困難となる。しかし、余暇や芸術文化、スポーツや運動などの世界が確立されると、非日常の世界に触れ、自分の生存基盤や将来の方向を考える切掛けが生まれてくる。文化資本の社会的蓄積は、単なる蓄積ではない。それは人間が社会を形成し、“自然”を活かしつつ創り出したものを、絶えず個々人の個性的な営みの中で自分の人生に採りこみ、成果を社会に還元し、蓄積を更新することを意味する。新しいものを生み出して自然の固有性を活かしつつ、個々人の創造性開発との共存に新しい価値観を求める新たな方向性については、池上惇「固有価値の経済学と人的能力への投資—有効価値の決定要因をめぐって—」『文化と固有価値の経済学』pp. 70～71、pp. 94～99、pp. 182～184(岩波書店)に詳述。

## プロフィール



佐々木晃彦(ささき・あきひこ)山形県生まれ  
発表：長山尚代と共同「フラワーデザインと生活」(文化経済学会〈日本〉福岡大会)、「フラワーショーの海外/日本の実体」(同、長岡大会)。(社)企業メセナ協議会幹事、(財)東京フィルハーモニー交響楽団評議員、(独)日本芸術文化振興基金地域文化専門委員会委員、(財)芳賀教育文化振興財団ボランティア顕彰委員会委員、九州 21 世紀委員会委員、文化経済学会〈日本〉理事などを歴任。著書に『豊かさの社会学』『文化産業論』『異文化経営学』、池上惇と共同監修で『文化経済学シリーズ全 10 巻』ほか多数。九州共立大学名誉教授。